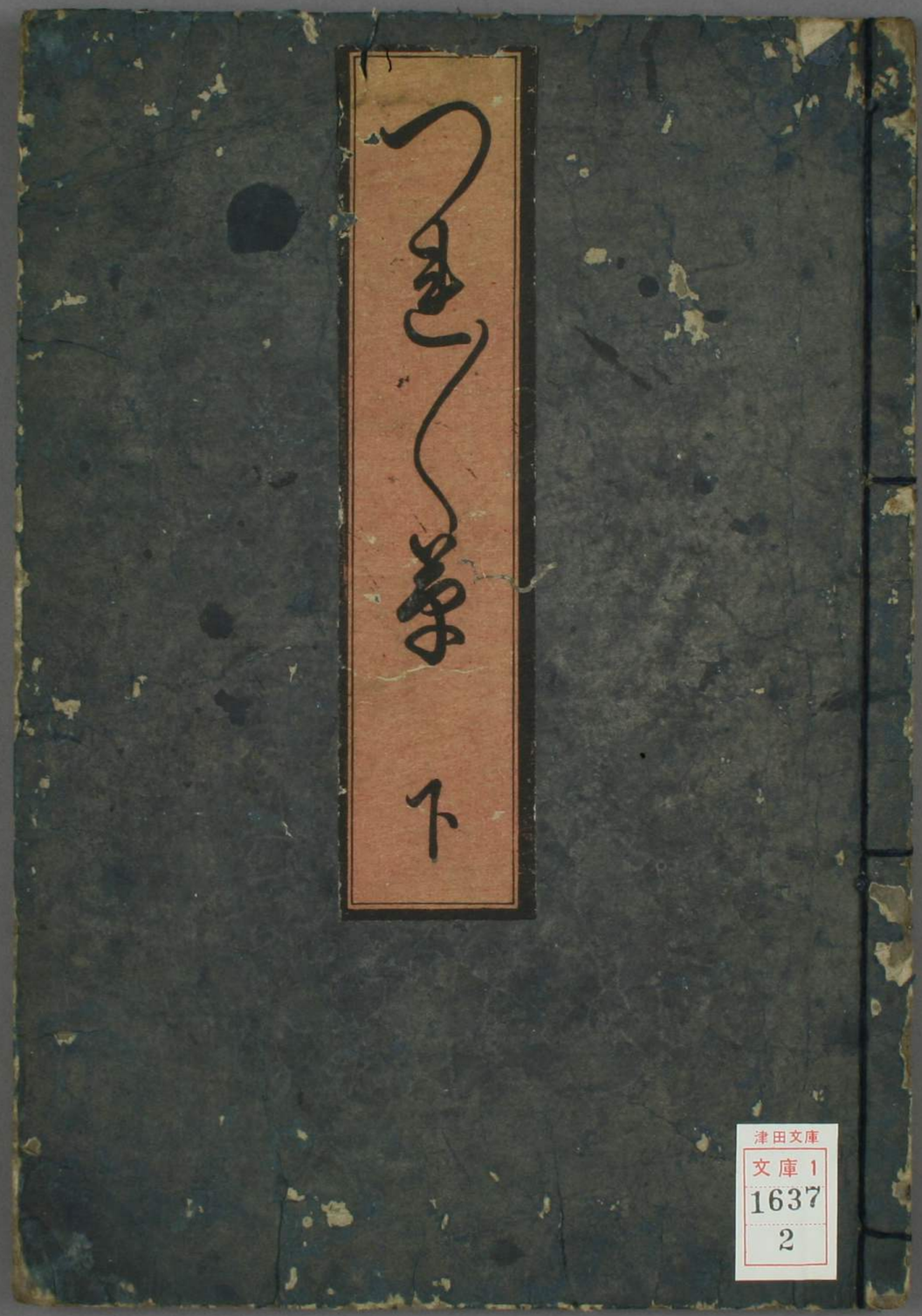

津田文庫
文庫 1
1637
2

早稲田大学図書館蔵書

つだ文庫

はきく草下の露

(夏)花いさりに月もさゝぬあなたのこゝろぬるゝ袖よりひく
月とあひぬるまこゝめて書乃めえもちゝぬも獨寝ふ情ゝ咲ね
屋紅梅の指ちりもちゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ
書ふも花ゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ようも。暁ちかくなりて。行出でゝるぶてんふうのをゝるゆうふ
てぬりたるの板乃。梢よりんてゝる。木のまの新うち。時雨るゝ村
雲のうきの程。みなく哀なり。椎柴もうゝ。みどのぬきてゝるゆう
なる。紫のうへ。さゝめたるてゝ。ゆみ。てゝ。ぬあゝん。哀もゞる
と。新哀ゝう。えんゆきぞへて。月花をゞさのゝめ。みてゝる。初うゝ。哀
ゆゑと。えさゝでも。月の夜に。新やのうちかゞゝもゝ。人るてゝ。ぞと
きのりゝうおゝゝ。れよ。人いひとへ。よとけるさ。海すもうんてゞ。
奥ずるさゝ。ゆもをゞさうなるゞ。ゆゝ。人てゝ。ゆゝてゝ。方ゝと
りて。奥どん。花のゝとにて。新ぢゝう。えゝ。おゝゝ。めゝもせゞ。ゆも
つて。酒のゝ。連ゝ。ゝゝ。ぞて。ゆたゝ。水。投ん。なゝ。ゆゝ。ゝ。ゝ。泉ゝ
つゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ

めきび。簡あるを思ひたつまきて衰なれ。大略ふるてそ。ふるてふる
みていあまきの猿ぞ乃まゝ。どこらゆきうふ人のうつまるうあ
まきこみふくきうぬせのへ物もさのこゝ多うぬよてそ。ぱ人皆
うせ。ん。張我身死ぐさに。ぎうきうた。程ふく行つけぬだし。
大なるうつ物よみと入て。やそれあるとゆくてんふてでふ
事をくあとゝ。おこるはなくうゆうぶでつきあぐし。
物の中にあり。人きるざる日にみぐ。一日ゝ二人のきうう
んや。ふぐ。物。紅岡さうぬ野ふふも。おる数多る日にあまど。おく
らぬ日かゝ。それぐひつき。紙ひてくものつうて折とく程かゝ。
つうれふもうくど強すもうぐ。ぐびうけぬ死なうぐふまでの
めきさてるふ。ぐうれつぐ。ぐうりきだゝもせとのどうふ。ふひな
んやまこと立とつ物をぬ立の石よて作りて立ふべる程ぐう

きんう。ぬのきの石ともきゝ。紙たうぐ人あてぐ。つをれめきぐ。ふ
いのぐきぬとうれどうぐ。ぐまぐうきに。まめきゆく程ふ。ぬのきも
のうきざるに。ぐうう。兵乃軍に出る。死ゝを。れる。紙知て。家とも
忘きぬ。ともうとる。せ。紙そむ。ひる。墓の。庵ふ。きづうふ。水石紙
りてめそびて。見とゝそれに。字とふ人るふとゝるかゝ。きづう。ふ。
のとゝ。云常のうれいうれ。ひ。ひ。ぬゝ。ざうんや。甚死よのぐめは
事。ゝくさの。孫よとくめるにとるゝ。

草 ふるきめきび。ぬの。蓑ふ。ふうう。ぬとそ。ぬうう人乃うとうる紙みる
とゝせうきぬゝ。ぐ。道りかく。見行ゝとゝ。れ人の去行ふとゝ。れ
ぐさうぐれうとゝ。ひゝ。ど。国汚国行ぐ。ぬ。ぬうきどもうひうきぬ
いりうとりふうとのあゝひのうきを。ふうとゝるを。母。屋れ。屋
に。蓑のうるとゝるぬきを紙よあるうゝ。家の。集よりぬ。ぬ。家の
紙出ふ。拾うるあゝひうきうゝてをうゝけるを行り。抗。茶ゝにも。

〈玉ハたしかに良ッカ〉

ふしてのさきにたれ。梅ちる蔦とうけるてそぷらぐくうつうう
ゆしうるされ。暗長明ぐ。ぐ。季初紅みもぷぐきて。根の蔦ゐ
つきうるそぐ。ぐるぐ。このまてうぐぐてそあるを。名残なくいぐれ
そうあるされ。根ようれるくをみも。九月九日菊よれうくらくと
いぐ。ぐぐぶい菊のとうをもみべたるそ。枇杷皇后文かうまを
めひて。根。ぐるれ。根のうちぐ。ぐうぶくをみなどのうれるぐ。
ぐうれそおうぐうぬ。ぐと。ぐけつくと。毎のめうとのいるを
ゆみ。あやめの菊みぐくも。ぐのぐ。根ぐうくうぐ。

（墨）家に有ける木に松梅雲いみ菊ふもう。花ひとくぐ。ハ
京梅いるれ。ぐよのをみるを。ぐひとぐせふおりぐ。ぐる吉野の
花。たをの梅皆ひとくすてそあまぐやえ梅ぐてゆうれをのなり。
ぐとちてくぐ。ぐらけうう。椿ぐとうぐ。ぐぐもぐみんぐおそ梅みをぐ。
出の付ぐるもひうう。梅ゆ。ぐれうと。紅梅一室ぐぐ。ぐ。ぐるも。

のさなりうる。紅梅みぐひめでぐくもぐ。ぐおうぐ。ぐそれ梅ゆ梅よ
されおひてぐおぐえをうけをさまて。梅よ。ぐぐつれるぐ。ぐ。
一室ぐぐ。ぐぐくちるぐ。ぐ。ぐ。ぐ。梅をうん。ぐ。ぐちぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
言ぐ。ぐれひくく梅をうん。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
菊ぐ。ぐ。今も二年ぐるめう。柳ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
て方の花りみぐも。ぐうてぐくくれ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
きも木ゆ。ぐうぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
秋乃菊ゆ萩。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
刈萱。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
る名の実ゆ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
めづくくみぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ゆうてみなん

(五三) 身死して後、財残るは、智恵のなさる所也。よろづにねがはずして、万事を放てるもつとも好ましかるべし。財を残して、子孫の愚なるを、思ひ置くこと、かへすがへす愚かなり。後の世を思ふ人は、財なほ残すべからず。まして、罪を造りて、残すべきにあらず。されば、人の財を、我が物と思ひ、子孫を、我が子と思ふ、これ、大きなる迷ひ、なほ、闇の中に、まどへるがごとし。

(五四) 世間の憂へ、逃るる道、いとすべし。東人は、ものの道理を、思ひ分くる事、あさく、情なく、ことの成るべきかたをも、思ひ取らず、ただ、我が身の、憂へ、逃るるを、思ひ、まことに、世を厭ふ人は、まづ、財を捨てて、利を求めず、人と、交はりを、断ちて、身の、楽しみを、思はず、ひたすら、後の世を、思ひ、一筋に、阿弥陀仏を、念じ、南無の一声に、すべてを、投げ入れて、ただ、この、一事を、成ずべき、なり。

(五五) 心かしこからんものは、よろづ、事に、触れて、まづ、我が、身の、憂へ、忘るべし。愚かなる者は、まづ、我が、身を、思ひ、次に、人を、思ふ。我が、身を、思ふ、故に、万の、事、皆、我が、心に、違へり。我が、心に、違へば、憂へ、来たる。人を、思へば、我が、身、安し。されば、賢き、人は、我が、身を、捨てて、人を、助く。これ、我が、身を、捨てて、人を、思ふ、故に、我が、身、かへりて、安し。愚かなる、人は、我が、身を、思ふ、故に、我が、身、かへりて、憂へ、来たる。されば、賢き、人は、我が、身を、捨てて、人を、助く。これ、我が、身を、捨てて、人を、思ふ、故に、我が、身、かへりて、安し。愚かなる、人は、我が、身を、思ふ、故に、我が、身、かへりて、憂へ、来たる。

(五六) 世を、厭ふ、人、世を、厭はず、人、共に、惜しむ、命、長き、ことを、願ふ、人、命、長き、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、財、多き、ことを、願ふ、人、財、多き、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、身、安き、ことを、願ふ、人、身、安き、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、名、高き、ことを、願ふ、人、名、高き、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、智、深き、ことを、願ふ、人、智、深き、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、道、聞かん、ことを、願ふ、人、道、聞かん、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、仏、成らん、ことを、願ふ、人、仏、成らん、ことを、願はず、人、共に、惜しむ、

(五七) 物、知り、顔、なる、人、の、前、に、て、、、

と揚らるゝの方にとるすゝかぐるぐてやどーおりるゝ乃方にとろ
らしい習ゝとろんとゝんとゝむげふおりゝひとゝとゝひがゝゆゝかゝゝを人の
ゝふかてゝゝ孫ゝゝゝ

しくて此相とうつるものしるしなり
のさにかあらんとて其人乃月日の
ひたるの指紋の人もさぐむべくぐ
きたぐ而をくべ人のうんぷふ
るべくべ

(百八) 梅の尾の上人乃とる給ひ乃
といひれば上人云とありておるを
字くとるのるでやいうるの人の出
いと為の給ひられば府生屋の出る
るの相の字なふ生ふてあかきうき
のるとそうんるとのごるけるくぐ

(百九) 河酒身参を行小面の乃智入道伝教と落るの相乃人こ
紙くつくこ給へといひる紙つて酒くこ
るうう為て記ふくうう乃ふ長じめる一云神のごくとへ乃人乃相

いう此おそくこ乃とひるまべ相てくこ尻ゆて淫女のるとに
うべ相をおほを行うにつうるとあやまるるとぞいひる

(百八) 明雲座主相者よおひ給ひくこのきり長付の雑やめる
と為給ひられば相人酒くこふ其相おくまとるとぷうるる相ぞ
と為あひるまべ傷害のおそまおくまとあくきに身うて
うるにもくおばしうて為るのふ芦とでるこるやぐこのくぐ
しあうとりけうにくて矣ふあ

(百九) 奏治あまくこ此ゆ此めまべ神のにけぐきるとくふるちう
くこ人のいひ出せるあり指式為るふるとるとくふるちう

(百十) 巳十八後の人身に奏とうるて三とやうぐれば上氣のるゆあり
必奏をべ

(百十一) 麻草を鼻よあてくゆぐ尾くるうどちいさに出ありて鼻くる人
て紙とくむとうつる

百五十二 能をたしなんとをる人、ようせざるに、なほいよいよにたしなみ、ぶちくくおぼえぐさ出でこんとそいとこんとめとおもふにつけまどひつつ人、藝もおぼえぬるなり。上手の中にすぐれつつ、なくなりてこそ、なほ人、天性をろかなりけるとうづまもどこぞにせどして、ものとおもひ、能のこなみなざるように、上手の位よりうつりけん人ゆゆしさきて、ゆくびなれたるをうるなり。天下れわのよもこの人、始め不堪乃聞、もまこと天下れ振猿もあきれぬまこと、も其人乃のとをれてあすぐしく見とおもしして放埒せざれぬせうをせにて、方人の師とあるる法乃智ぐ、

百五十三 わる人のいとく年五十にかまでよりてこそ藝をびをつべたるうたげをもくこんぐるもの、紙を人も忘れうんど、前よ海ぐりうるを、先ゆくんぐるし、大うる方のもうるさかめて、勝有てそめやそくあくこ海りくれ世俗のるにくるうて生涯をとうとこと下無の人なりゆくくおびんん事ゆゆしびゆくも其報をもうるみぐをばつらかぐるてゆしびしゆうるなくしてやまんゆ第一のるなり

百五十四 西大寺静然上人、勝うぐ肩白く、滋ふ年くけ寄る五六にくく円裏へ来くまるる紙西園寺円大臣のかたうとのけしくやとて伝作のさそく為乃資朝公をとんくまるよりうるにひとやされうり、毎日よむ大の浅まくく老さがひて。毛をげうるとひうせてびりくれ寄うとくうんひとて円府へ来せらまくるかとて

百五十五 為兼大納言入乃言とうれて、武士共おううこて、ぶたうんのそもりうれ、資朝公一条こうにて見をそおるる海ふくくせふあうんとひ出ぐくこてあくこ海りくまとくるる

百六 ひと人東寺の門よりあやどりせてゝ出てゝ不仁者のあつまるをみるゝ人もとゝ見も移ちゆゝ行てゝ見るとゝゆゝ
なをとゝくゝとゝゝくゝよりまゝ見たゝものなり花のひとゝるにゝまゝ
つゝとゝひてゝまりゝ結ひゝる紙ゝよりて其奥つゝてゝ見ふゝゝゝ
くゝとゝゝ人ゝまゝゝゝまゝゝとゝゝゝ

たゝ大臣殿の家三条うておくるかつる間裏みく有りかとゞこれなる
にようて他所へ移さるゝ安堵ゝ
みどのゝ下女実説とぞ

(百九) 筆紙ときどおろそれ墨とそれぞ書をそそんとゝ筆とそれ
ぞ酒とゝひさいとそれぞ掃うそんるの紙ゝ
て家ゝゝゝゝゝ不善のまゝとゝゝゝゝ
数の一句とそんきゝ伝のとそくゝ前後のゝもそれ辛苦ゝて多
ゝ乃姫とゝくゝしるゝゝも西ゝうゝまひゝとひゝげゝ酒
ゝひゝ紙ゝゝんゝ色別ゝるゝ西の益ゝりゝさゝにゝゝゝゝ
も仏おゝて西ゝとそれ絵とゝゝゝおゝるゝちにも若業とのゝ
ゝ流せゝも数孔のゝゝゝゝ縄床ゝ座せゝ見ゝゝて禅定
なゝゝゝ幸程ゝゝゝ二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と強て不信とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(百十) 不盡乃そゝとゝつるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
絵ゝに凝歯とゝ行るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(百十一) みかしとびとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ようセ十スヨ大ゆうちぐゝど

(百四) 遍照寺の弟仕法師池の名と日ごろいつけく。堂の四まで
えとまれて戸ひとつあをとまぶ教も知ど入ぬ所なる法とのを
も入て立こあてとゝ〳〵つゝころ〳〵ろるそひしおどろしくゆる
と。夢うゝうゝに聞て人ふつげられぶ村の男たおこりて入くるふた
屋ともさめたあ人る中に法師まゝるとておゝせ強ちゝろ〳〵れ
ぶ法師とゝ〳〵てゝゝろ仏庵出〳〵ろゝるゝゝろと面の名とそ
にうけさせて禁獄せれよろ基後大納言別当の時よりん作ゝる
(百五) 左衛の左乃字題うゝゝとゝゝ法湯の峯お海乃事ゝ
ゝうゝ日ちゝ人乃ゝ作ゝ言平ゝ自筆のゝゝうゝにゝれるれ
紀近清関白屋ふあゝ点うちゝるゝ出ゝろとゝれ
(百六) 世乃人あひあゝ時ゝゝゝゝゝゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ必ゝゝゝゝゝゝ
を作ゝ多ゝ益の侯なゝ世ゝれ浦後人のせゝ自他のゝあゝ笑あゝ

くゝゝとくなゝ色て狂時ゝゝゝゝひのゝふゝ益なゝとゝゝゝゝどゝゝゝ
(百七) あづまの人乃狂ゝ人ふまゝゝゝゝ和の人れあづまにゝて分とゝ。
ふなるゝふゝとゝかれゝる狂家の侍すべて我侍よゝゝゝゝゝゝゝ人よ
侍ゝゝれるゝゝゝゝ
(百八) 人乃のゝとなゝあゝるゝゝゝゝゝゝゝ

とうさうごとさうびなり。人とし
ざる紙徳とゝ。紙ふ海さるゝれ
みくも。文藝乃とゞまるゝ
海さまとゝ人ゝ。ゆとひて
こゞくのとゞあぢ。ぢくしこそ
いひそれぞひをもまひ
とゝ長しゆる人ゝ。ゆうあ
ゆふこゞてぢわふ初ゆ
年老さる人も一ゆにをゞ
非ふとうんゞいさる老の
ぞさゆまどそれもそまる
よろとつさゆ今ゝ
ゝ乃ゝとゝゞ

に初そびそのふあそい
ゝ。ふのまうさ
ゝ。先祖のゆまれそも人り
ゝ。ゆ出くていそゝ。ゆ
ゝ。おこふもゝ人も
ゝ。ゆ海こ
ゝ。ゆ長ゆ
ゝ。ゆ人の海よ
ゝ。ゆ
ゝ。ゆ
ゝ。ゆ

いしてんぱしーんふむらくまわしくさらんんのつもくみて今ゑ
づーぱらんふんちづうてなどいさんんぱひうぞうみおあくざうべ〜流儒
ぐあをえ眼ぞきもあこえるみあうぱ甚てくあえよんの来うてのど
ひふあ居して海りあるぱとうーみくもくくー実ことゑてひぐる
とぞうぱひおこせくるぱとうれ〜

（夏三）貝をおわんんの祇まくるとぐあえてぱうとうくーそぱの
袖ろうげひざのトまでめ祇んぞるまにぱくるとぐんみおかうれぬ。
ようくおわんんぱうそまでうろうくーとうとうんとぐーてぢうえぐうり
おわんあうあきどぱ多おわんかなう。碁盤のときて石代うそうぱじ
んふむうひある石をまうりてちくくぱあうとぐ我ゆうとうとく
ぱんくぞあるひーるめをとぐにたうじけが立てる石りあんどあう
るぱろあぱんよむうこてうくむ〜ぐうどゆぐうてうとうくうとべ
ー。清歌ぐ祝ようぬるえ祇ぐーて前祝とうくあうんとうぱ

とたもうんぞ　もうくやけうんぞ　ちをはくまどかろくかれき
みてみぐうなまぐさを國うみうどそもしく時　そぐめてちろうて
をりもむ　風ふかうろ　温ふうて　病と祈願　ようろうるぐどろ
人ろうと　警書にいるぐどし　月のまくかるうろ　乃　秋とゆ　恵紙
かぐまうてろとろぐしくせぐ　甚紀とろくみぐれんゆ紙　紀ざるうろ。
禹の沙ろくこ　苗を　江せ　も　軍とうして　流をろくにろうぐろれ

(夏四)　ろうろ紀　時　血氣　用　ふ　ゆ　ろ　ぬ　ろ　ぬ　ぬ　ぬ

とろうる人とつかうまつりぬ。こたのんよおとこうんや
(夏七)せふいんえぬるれおくれたなりぬもあるべしふぜん酒をとめ
てまろのませてうれ奥とうるぬいゆ(たんゆ)どのひ人乃
新つとまこうげふ屑とひそめ人めをたうてとてんとし。
迎んとするとてうてーとめてどろふのませつまどうる
れ人もぬちまちよ狂人とかておこげゆーく息笑する人もめれ
まんよ大じ乃病者とかて前後もまうどをふまとぬそんべ
紀日おどんおさ清ーうるぬべーおるる日まで以いてーおるるどに
よひ月ーぬを屋ごてるゆうにてきのれるれをどどおか
やけうてうーの大ゆとうそてどづーひとなる人をーてうるゆを
ふをとるゆぬひもゆく礼義ふもそひうぬくうれめふひうそ
ん人(孫)てにてーとおうんざうんや人のゆうるかゆーひふうう
とこれうれ人ゆふてつそ(実)そうんゆやーうーだそ実ぬ。

人のよゆくうるどにひうーぬひ入るそ清よんふふてとれ
人もゆてゆるゆうゆうひのちゆるぬぬおゆしゆどひもうど
ーそれきうくかげくゆわなれうれ日れの人ともぬどど女
ひうひうれうふのきゆうゆぬどうゆうちさおくお
ゆくどづうをうひうるそ清ーぬ人ちうみとうてゆふさー
ううひゆ年老る法師ーー出されくううそうるれ奥
とゆうこゆざくゆをゆくらまどずづうる紙奥ーどんる人さん
うと清ーくふうーゆるふゆうるれたうそうるうひ
そうをゆるいるひうれーードざ清の人ーのうゆひいそうひてゆさま
ーくそそうーれどゆーくんうれるゆのそゆうてどそいゆるさぬ
れどもそーとうて猫ようどをちる車ようそちてゆやまちーつ。
れふものーぬそうて大踊とようづひゆてどぬひぢ門の下などに

ひれてえもいそぬるたちちゝ老けさうをゝる法師の。
小童乃ゝて紙おさえて。ゆえぬるもいひつゝようめたるぶせ
ゝゆゝぶゝるる紙しても。ぶせとほの世も益のゝきうぞる
らぶゝゝぶせんぶせおわやまちおりく紙としなし病とまゝ
く百業乃長とゝいゝど乃の病い酒ようてそおてきうきゝとゝを
ゝとゝいゝど。辞ゝるゝゝそゝるゝゝめゝうゝをもゝひ出ゝくなゝめゝるほの
世ゝゝ乃智恵とうゝうゝひ。若根とやゝくゝと火のゝゝとして恵とは
万の戒をゆゝりて地ゝゝにおゝつゝゝゝ酒をとりて人ゝよのませゝる
人ゝ百生ゝゝ乃ゝひかれものゝよゝひまゝるゝとゝて。ぶい祝めゝたなゝ
うゝと酒ゝとゝゝおなゝゝどゝのゝゝゝ拝ゝゝれゝとゝもゝゝゝ月
の病ゝ乃ゝゝゝ

一時ばかりさるのせき勢ひ強くして、たちまちに雨を降らせ給ふなり。みうまはにをけ[illegible]れば、ひとしきりとぞ

百九 鑑倉中書に曰く、はまの宿りの雨降りて、はつまの屋の
うらごろれば、ひとせんとちさるに、俄に本源波入りのごと
つまのうづをうるほしたてあくまりけるに、屋にたうれて、
泥去のうづひかうるもどりあるん勇をるもどりとんん
じ、あつまりうぼうの紙あるりのうちうち出て、吉田中納言の
ひとをかごの男をやかうけるとのうひうしうづをうづ
一ひうたいうとおひうるのとぎうれうづいやくことゆうのう
ひう。屋の後をきうるうるたをるごときうるい屋実かとぞ

百十 或書に曰く、おのれ神宗をうんで、人を指して宝物と
ぶ。其人ぞ指ゆるなどつをとぞ。四ある女房の中にあ屋のひ
ぎよ。屋のぶ屋のれ紙ひくことあきとたのびゆうたいひうう

一ひうたをうたをうるとうや

百一 入宋の沙門乃眼上人、一切経を持て来りて、波羅のわうやけ
ぶとりて、而に安置して、てうふ着撈巌経を傳じて、那蒙沈る
と号す。其蒙のアうれ、ひ蒙沈るい大門ひ向なり。ひ師乃伝
とて云伝うれど、西域伝法記伝などみもうをぞよ而うんうう。ひ師
いう水ぞ覚えてうやうされうん。ぞばつうう。唐土の西ぬちる。
ひ向ひうち海なりとうた

百二 さうだうぐうぐうぐ月よ行くうるぐちゆうと玄言院うう神泉苑
へ出て、焼あぐるうう。法水紙の池よりとうやとう。神泉苑乃
池をいふなり

百三 ゆきくこうあんぐのこあるとうるうぐうつたうるひうるう
ぐくまぐ彩君とうぐたまれこあるとうぐきとおやまうてあんぐ
のとうぐうなううきうや水のまきうみとうくぐしとおるわきうア

ゑ。昔よりいひ伝る事ゆゑ。為朝院おさなくとりまはして。為
のうちにくはくまをりるうしゑ。煙波助が田地ふ出さう
百四 四条大納言隆親ゆ。ゑ。ゑ。ゑ

ざうんんのうだかりとそきなんや

百八 若田とりるまの乃ゆりしゑるてとふこれれなりゑのちゑ
あゑそゑゑべゑゑどと志るべしのるべきるこびまづゑくゑてづゑれ和
ゑゑれ和を志るべしゑ次よろゑゑのがにわやうれるやゑとえ
てんふゑるるわゑゑび甚るとんをゑりゑどゑ用をとゑををざふ
とるのりとゑりかるをゑをしさゑうのるるりとゑれ

百九 茅の乃乃ゑゑるゑ不憚なりとゑ先憚能の祇家のゑゑ
ぶ時ゑるゑゑどゑるるゑれるるゑるなくづゑしゑてゑりゑしゑくせゑ
とひとゑふをゆゑゑるひとゑしゑりゑゑゑ芸能和他のゑふゑりゑ
大ゑるのるまひゑるゑしもゑ思ゑりてけゑ志ゑるゑ祇のりとゑり。
きくゑにてゑりゑれきくゑ知ゑ光のりとなり

百十 ゑるりのゑを法師よゑりて学ゑして因果の理をとゑる。
祝経なゑりてせゑりるきゑつゑさゑもせゑをとゑひゑれゑをりゑ乃

ゑて祝経師よゑりゑんゑあよゑ出るにゑのゑりひゑり。雲早りゑ
ぬ身の乃ゑ師ゑ待ぜゑまゑん時るゑどむゑりおゑせてゑんより
志りゑゑ嵯ゑんゑゑりゑゑべゑりゑひゑり次ゑ仏事の場酒
などゑくゑるゑのゑんゑ法師のゑゑトに能ゑれゑどんゑをゑ
ゑゑくゑゑ尾ゑりとゑまゑゑゑりゑをゑりゑりゑゑ和ゑぎ
ゑりゑくゑりゑりゑ入ゑまゑびゑりゑくゑゑて覚ゑくゑりゑゑ
祝ふ祝経ゑりゑりゑびゑゑしゑまゑりて年ゑりゑにゑりゑ法師のゑにゑ
ゑりゑど世乃の人なりてけるゑのゑ祝ゑゑ結ゑゑふ身ゑとゑ
て大ゑる乃ゑとゑゑ能ゑゑもゑつゑ学ゑ因ゑゑもせんゑとゑをゑ久ゑく。
ゑりゑまゑるゑれゑもんゑふゑけゑゑりゑ世紙のゑりゑにゑゑひゑて和ゑゑりゑ
れゑ。ゑんゑさゑゑゑりゑる月のゑまゑ乃ゑるゑにゑのゑを浦ゑれて月日ゑゑく
ゑ出ゑりゑくゑゑゑゑなゑくゑゑて身ゑ老ゑぬ絵ゑる和ゑの上ゑゑふゑもなゑりゑ。
ゑゑいゑゑゑゑに身ゑゑもゑりゑゑど。ゑるれゑどゑゑ乃ゑさゑるゑく獣ゑゑ孫ゑ。

たゝつまゝ坂とゝぐるのごとくにぞとゝろくぶされご一生ろうらむ
ゆゑとあるまゝうゝんゝとれ中にゆきうゝるとゝくゝひゝゝ
べく。第一のゆ紙案じ宣て。其外ゝゝゝ拵く一ゆをゝげゝく
し。一日の中一刻のうちもおまゝこのゆゝまゝゝん中にゝゝゝも
益のまゝゝんゆゝとゝゝて。其外ゝゝ拵くゝゝゆゝゝゝぐゝゝ
なゝう。ゆのゆゝゝも拵ゝゝんゆゝふゝりゝてゝゆゝも如意ゝゝゝゝ
へゝ碁ゝゝうゝゝ。ゝゝもゝゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝ

門ゝを守りて通ることなりてをきたれぬまぎびしうもとび
先のひてん日紙さうぬ事なれば西山のゆうりてゆてそひて
めとそゝゆゝ一附のけごをかうち一生乃けごいとる。見とおそ
るべし。ゆ紙ゆおさんとそうぐ。他のゆれ破るくともいべうだ。
人の弼をも恥屋うゝど。万ゆにくどゝてこ一の大ゞ如屋うゝど。
人おまゝこゝろる中にてゆる若きをかれをそれのをそれる。
どいゝゆあうゝこのべれ雪ひるゆ紙偽ちうゝと偽るを豊蓋
法師をあ偽うるゞ雪てゆ西のうるふこのうさやのうし
ゆ人の蔦乃ゆゆゝひゝこのべれ雪乃ゞう弱まうゝんといひ
るゝとおまうにわさうゞゆ西ゆをてゝと人のいひれれゞ立下の
ゆをも偽ゝるゝわうれ人の家い西乃勝乃を偽わゝ我も配る。
雪をうせゆゞ弱ゆてんやゝそて巷出てゆつゝ習偽うゝゆうと
ゆ偽ゝるゝそゆゝしくゝゝゝゝ笑を。飯時い刎切ゝとそ偽

偽といふゆふも偽るゆるゆゞ蔦といゞうゝゝゝひるゆゝ一大ト
因縁をそゝゆゝうゝゝ

夏一 今日い甚事をかさんとそゝ人どゆうぬ志出来くゆゞれ
うゝゝ偽人いさうゝゝてゆをのゆぬ人い来り牧ゝる方乃ゆゝさゞ
ひてゝゝひゝゝぬ乃だうゝいうるひぬゞゞゝうゝつるゆゝてゝる
て安うるゞれるゆいとんゞゝゞ一日くゝゝゝ牧さ偽ゝてゝひゝつるふ
い仰ゞゞ一ゆのゝうもうくれでゝゝ一生のうをゝゝ志うゝゝてくの
あゝ神ゝ皆をゞひゝうとそゝふゝおのゞうゝたゞぬるゆもあきゞ。
いゝくわい宝ゞゝゝ不宝とゝ仏ゝゆるのゝ孤ゝてさゞゞ

夏二 素といふわゝて男のわるゝ牧れゝうも独偽ゝてなど
ゆゝて。ゝゝゝ雅ゞゞ賀ゝゆぬゝもゝいゝゆゆゝをゝを人
てゆゝい偽をゞゆゝつきゞ。言下にゝゝをゝゝうゝざゝうゝてる
るゆるゝ如紙ゝうとそゝひゝ宝ゝてゝそひゝてゝあゝゝゆゝゝも

おーたちろうれよ。ひとなかうつぱし男をぞらうてーておぐれとはー
りりわるーるめ。ぞーとんいちばうふてれとぞんぬべーはーて家
の門とおこるひとをとあーるかぞ。ひとはとーーるみどぞ出さてーーづき
ぞーしーるんうーー男をーくぬく場所よぬてーーるーるかれ。
なんれぬを淺まーーいうぬかをりもぬ雲をひうんふぞーとーろ
づーをーーーうーんかのをあもかうをーよーれをーーあーよをみぐ
ら時ーーめーーひとをまんーーを年月ーーも絶ぬかーーひたなーるめ。あ
ーーーさ海ーさーーとあーるみどせんぬめづーーーりぬべー

(夏三) 夜ふ入ーくぬのをーんをーーとーーーんーーとはーーー方の抱ーーーかーーーーー
ぬーーーを。夜のーーーれめでーーーーれ蓋ーーーーーーーーーーーーーーーーーよ
ーーもーーーん。夜ーーーーーーーーーーーーーーーーー

百九十 達人の人をうる眼ねをとりてもあやまる事あるべうもぞ。ある人のぞふそうをうる人出てゞ人をとりうるのあうんなぞ。かゝる人のぞふそうにかくれ伝をおもしてゞ人にうるに虚言をかゝるそうる人ゞ人のうそをいさうおぼつかなくぞ。ぞこのまゞもあうでおんゞわうる人ゞ人にうそをいかゞこねども。人のうそをれゞさもあうんをうるゞ人もゞ人にうそをいかゞ推しかゝるうをたゞしうそげふおうかづきかゝるをうるきゞたやうくたらぬ人ゞ人推しゞ出してゞうそをれうるゞうをおりひかゞうゞ推あやまりもてをあきとなやしむ人ゞ人をうるゞうもなうるをうをうゞ人ゞ人にかなきゞもをれうともいをゞおぼつかうをうぬをうをうくのうゞかくをうぬ人とれるゞやうあくをうゞ人ゞ人をうゞそゞをうゞあうをうゞてゞをとを

しをあざむくゞゞ人ゞ人をおゞゞかふあうゞてをうをとあをとうる人ゞ人愚者の中れあうゞをうをうる人ゞ人のをうゞ人ゞ人をいけさゞ人ゞ人のをうる而ゞ人ゞ人をあをうをもうゞをうをもゞをうをぬゞゞ人ゞ人のをうゞ人ゞ人をうれうをうんゞ人ゞ人をうゞ人ゞ人のをうゞ人ゞ人をうゞ人ゞ人をうゞ人ゞ人をとかゞをうゞ人ゞ人をうゞ人ゞ人をうゞ人ゞ人を

て繁昌いうぐ行なへんとうされなきぶ法身のるましい長伏の
家ぐ志ふるみひとだろうこそ人のひろうさてはよ行るまこるぶ
相國小と拂とうんく西京乃祇とてそたるまざろれ眷屬の惡
鬼おく祢とおそるゆへ祢社まそ弱ようそをそづさてろ五
とぞ行るまこるか

(夏九) 猶ちる乃信のをふもわるび定部の女鶴といふる延喜式にうえ
ぎうをとて教さぐ海うる公人の通号にて

(二百) 揚名みようだらど揚名目といふ者五改る乃要畧よあり

(二百一) 横川の沉宣法師ガ伝ふ小唐去呂乃ふなり律の者ゆ和ふ
い單律のふみく呂の者ゆとやき

(二百二) 異行を記ふかそく。沉行い記ふひろ〜法藏よをえい沉行仁寿屋
のゆようくうるらまこるぶれ行ゆり

(二百三) 退凡下家乃乗初濃ふゆ家円なる退凡ゆり

(二百四) 十月を祢を月といひて祢ゆにそうる沉ようゆまるるゆ。
ゆとゆもんくど。但西月法社のまろうなれ沉ゆよび名あるうぶ月
百乃祢ちを祢を〜わつまうゆかどゆ祇わまども其外祇ゆ
しまるゆゆ伊勢みぐとふみふ月とをぶれる其例もゆ〜十月
法社の沉を伊もをし。但ゆ沉ゆ不右の伊なり

(二百五) 勅勅の祇に穀くゆ祇法今ゆをえくまるる人ゆ〜るよ乃
出惱大るを世の中れさぐきゆい五条の天祢ふゆをとうけるる。
穀るに沉れの沉祢といふも穀ゆを〜まをうける祢ゆり着名長
乃員るる穀とを家よかをるまゆをまびゆ人ゆいるどぶ事絵くゆら。
今の世ふ対をつるるとふ必にるる

(二百六) 犯人を去ゆとゆるうつ附い拷罪よをくゆひつるなり拷
罪の拷もゆるる祇法も今ゆるれを人ゆ〜とぞ

(二百七) 比叡ふよ。大師勅信の起信とゆふゆい義恵信正事をゆめ名

ゝるかなり。記傳みといふる。法曹ふい甚さとかゝ。ぢ一人の雪代
をべて記傳みよつきておこかゝる改いなれと。を代ひるゆるふゝる
なりゝ。法合ふいあ決よ様とてそど入わゝ様五べゝ

(三百八) 徳大寺右大臣検非遠使の別当の時。中門ゝ使廊乃
牌宣おこかゝきゝる猫ふ皮人あさうぬが牛をゆれて廊れう
ちへ入ゝ大理の座乃を海ゆゝれうよのがりてみきうちうを。
郎まうゝるおりき性吳ゆうとて。牛を陰陽師のうゝつゝ
つゝべさよう。若ゝゝゝ紙。父の相国内ゆゝ牛に名ゆゝ。是
あきいばゝへゝのゆゝざゝん。ゝゝれ皮人ゝゝゆゝ出仕の激
牛と。ゝゝゝべれゆゝかゝゝとて牛とゝ立にゝゝて郎ゝうけゝ。
ゆゝゝをゝゝきふゝゝゝ人て面事かゝゝるゝゝんゆゝ式
ゝゝゝゆゝゝまゝゝ時ゝゝゝ

(三段一) 人の田を作るものの、その田の畦をこそ、人とつくりそこなはめ。我が田をばさしておきて、人の田の畦をこそ、人とつくりそこなはめ。見る人、あやしびをなす。されども、なほ、我が田のあぜ、人のこれをつくりそこなはんこと、いとをしからず。かくのごとくの事、一つにあらず。

(三段二) 嘆かはしき事は、世の末になりて、賢き人の、才ありて、法をおこなひ、道を学ぶ、しるしなきこと、これ、偏に、末の世の、賢にあらざるが、人の才を妬みそねむ故に、賢き人、才ありて、用ひられざるなり。されば、賢き人、才ありて、用ひられざるを、嘆くにあらず。賢き人の、才なくして、用ひらるるを、嘆くなり。

(三段三) 万づの事、人まかせにして、我が心にあらざらんこと、人、誰か、嘆き、憂へん。我が身、思ふままならぬ、口惜しさに、堪へずして、嘆き、憂へるなり。

(三段四) 秋の月は、さらなり。

し。春は、あけぼのとして、やうやう、白くなりゆく、山の端、すこし、明かりて、紫だちたる、雲の、ほそくたなびきたる、

(三段五) 夏は、夜。月の、比は、言ふに及ばず、闇もなほ、螢の、多く、飛び違ひたる、また、言ふも、をかし。雨の、降るも、をかし。

(三段六) 秋は、夕。夕日の、差し入りて、山の端、いと近くなれば、烏の、ねどころへ、行とて、三つ四つ、二つ、三つなどの、飛び急ぐさへ、あはれなり。まして、雁の、つらねたる、いと、小さく、見えたる、いとをかし。日の入り果てて、風の、音、虫の、音、など、言ふべきにあらず。

(三段七) 冬は、つとめて。雪の、降りたる、言ふも、更なり。霜の、いと、白きも、また、さらでも、寒き、朝、火、急ぎおこして、炭、持ち渡るも、いと、つきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、火、桶の、火、も、白き、灰がちになりて、わろし。

あそびまとそおりいろざてん人ぞ。ふそろうろうどれるなり

三十五 ぜん茶乃史燈に史とおくいとれいぞ。ぞ。ぞくうさじるぞ。ぞん

らけうきぐちふうとぐし。さまだころびゆらぬゆうにそろて。

ととそつひでさなり八懐の百姿ゑ佐まの人浮夜と名てもふく

炭をちくきんでおるゑ職乃人。ぞろさとの紙名ろる日史ぞ。

とりちゆるるーのとぞとーさきろ

三十六 想夫恋とふ楽ハ。女男とそろるゆ人の名よいわうびぞとは相

府蓮りーれうるゑり。晋乃王倹大臣ーて家にたちとそう、

て名せーとれのくなり。おまとう大臣と蓮府とふ週忽も週

鶯ゑり。週鶯國とそろびとのろれまわう。其名ひと淫ふろく

てのらにそうてどのまぐゑゆ乃こふと奏せーなり

三十七 平の宣時外臣老れのらひーびろにさいゆうーび入乃わる

うひの乃にそぐるゆわうしたぞてとゆぐーぞ。ひそれのうて

とゝのくせ〜わどにつゝひさゝうてぴゝてれるどろさつゝはぬよ。
夜ゑれでとゆうゆうゝとそゝとゝあゝゝゝるひゝてきゝうち
くのゆゝみゝくまゝろゝるゝにでゝゝふゝゝけゝろそゝでゝそ
出ゝくゝぴ酒紙ひゝろゝたゝうゝべんゝがゝさゝうゝゝゝけゝきゝゝゝつゝるゝうゝぴゝうゝる
ゝそゝみけゝきゝゝゝ

ある紙をもちてやうざうなる孫ひにたてまつりをはべりぬ。
ぐんそうふさざとのわうぼ我をもとべさ無念なれりそう
くつくつとそれくふ勇をもかとべりぬ次に猿をぬのごとく
てつひ男わとたべぶぐ貧者をまぬぐべりぬ次のごとく
紙ろごくとそきとうとそたてさぐりちゆるゆみうれ次に紙
をとりてもいうくしるゆみうき次に正直にして紙をとりて
をべーひ俵をまゆりて利をとりめん人に富乃来るゆ人のうる
につさ水のてぐれるよたてさぐふぐごくぬべーし猿つりてはさざる
時に裏頭麦色をとくせどぐ若和をとうざるどぐ正紙をとのさぐれども
んとそーうふかとくきのーとりさ抑人に正紙をぬせんぐるあふ
紙をとりむ猿を紙をとるゆ紙をとうるゆぐ俵ゆ(なり)正紙あき
たゆうゆどぐ猿あきとども男ひざるんぐまつるく貧者とすじ。物をと
りきのーひとせんぐひとてうぐんぐ貧者とうきてふ

ぐーうどと実ーうろ。欲をかーして楽とせんとうにまうーー。紙をうう
んようををゆむ者ゆるあるひてきのーひとせんとうゆまざう
んふにまうぐ。変ふーうてい貧富ーく正ゆ。完竟に程即ふひと
ー。大欲に無欲ふ仰ーう

(三百九十九)狐に人よりひにくわゆう。婚川郡ーて。金人ぐ孫ーる豆を狐ーふ
る。仁和ーるふくーるゆちれおを見る下法師ふ狐三匹ーるをてーひ
紙ーをいかをわーて見をとゆせぐる。狐二匹つくひーうれーろー
ぬ二いゆげぬ法師にあまーて正ゆうをかぐーてゆ人なーうるを

(三百九十)四条黄門命ぐーきていーく誘秋に乃ふれてふんぐーゆれもの
なーうぐ。ぐん日まーて云。猫童のーうを拾て荒涼乃ゆれた横笛乃
ふ乃穴に鄰いぐーれ正乃ゆるーて。ひそーふ見を拾ぐーを穴に平
の穴に平須ふの穴に下云須ーう須ーうるに勝絶須を見ぐそーう。
上の穴双須次ーふ鬼猛須をあれて。夕れ穴黄猛須ゆーて次ふ書猛

洞と並て中の宮盤渉調中と云ひのあつひ神仏洞あり
にゐくに皆一律とめるにこの宮のそよりふ洞るとそ
て。さらもろ紙ゐるゐひそ紙沙へる其夢不性なりされば
宮とゐく時ゐ水のくのをゐ沙洞ゐ和ゐよゐいど。ゐ紙ゐる人ゐ
ゐ紙ゐ管れいそゐ紙ゐ無ゐ先達ゐ生紙ゐそるくといゐる性ゐ
ゐそと行ゐ紙他日ゐ系義ゐ行ゐ。猶ゐそくゐあゐせくゐるれゐ。
きゐゐくそゐなる。猶ゐゐきゐゐゐ息ゐ日ゐそゐそゐくゐ
ゐ和ゐきゐ宮てゐふ仏ゐのよゐ性貴とゐ人てゐを入る事ゐ乃
宮のゐふゐゐゐひゐゐゐのくゐとそゐも宮ゐゐくゐけ
ゐゐゐきの宮もゐゐよゐてゐゐ行ゐきをもゐ紙ゐいを呂律の
和ゐゐゐゐゐゐ人のとゐゐ。紙和ゐ夾ゐゐゐとゐ紙

三百三十三 何莫も色ゐいゐゐ。ゐゐくゐゐ色ゐ夾ゐ乃ゐ。
都ゐふゐゐどゐゐ夾ゐ紙ゐ伶人ゐゐ行ゐ。ゐ尚ゐの系ゐ。ゐ宮を

ゐゐくゐゐゐのゐゐ行ゐゐ。ゐゐゐゐもを
ゐゐきゐゐ宮ゐ。今ゐ行ゐをゐゐをゐゐゐゐ沙ゐ六
時ゐ宮ゐの中ゐ乃ゐ達ゐ夾ゐ達ゐ調ゐのゐゐゐゐ。ゐ暑ゐ涼ゐく
ゐゐゐ行ゐゐゐ紙沙ゐ二月調ゐ泥樂ゐ舎ゐ。ゐ雪ゐ云ゐ中ゐの中ゐを和
ゐゐと。秘義ゐのゐゐ。ゐ一調ゐを和ゐく。ゐ行ゐきゐ夾ゐをもゐゐの人ゐ行ゐ
ゐゐ紙ゐ紙ゐ達ゐの夾ゐ夾ゐ達ゐ調ゐ紙ゐ。ゐ一ゐ。ゐ云ゐ中ゐ乃ゐ調ゐ。紙ゐ園ゐ精ゐ舎ゐ紙ゐ
院ゐの夾ゐゐ。西園ゐ紙ゐ達ゐ夾ゐ達ゐ調ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐ紙ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

かつぶしにつきあはせてとおりてゐる若てとのかにかけて方のおりたる紙
おほく付くたたの袖を人よねをくぶつくかとぞふもとぞふもとぞふつ
さくるしひろさをいとみぐるし

三百四 行若奈良東大寺二条院へ参りまゐりて亡者の追善のために
事ゆ勝利おくれとゆさせ給ひ
とりされうるとするたいうふくかやひるぞ念仏は法華
ゆさつ法華ぎとかけまぐ我家ゆれぐさぐ
ゆさ法かりうつまとも法さ
べしと出ゆ経文をんおよびぐ仏のようんとうるぞとかさひてとゆ法
つぐいうぐりさんとゆひて本経のさしゆ法ゆ付くぐ真言法華経
をぐりつるなりとぐりされうる

三百五 まづのおかいとのい壹名ぐ
りい僻事なり

三百六 法陽師ゆ家入乃猟金ようりて弱法ゆりしぐんさしへく
ひ座の廣紀ゆ法ゆ法ゆ
つとむかそ乃一つ法して皆自に
とも法ようおりんゆい益ゆ紀ゆなり食ゆ菜経ゆどうくべし

三百七 多久資ぐりるい通憲入乃家の名ゆ中に興ゆ先をえくび
て猟の猟師とひるゆよ義てゆ法ゆ
せ。鳥帽子を引入くりけまび男家
りゆ。ひ芸をつぐり。見白抑ゆの招えゆり紙神の本紙をうくゆ
法源先ゆおりくゆの紙法ゆ法ゆ
義させゆひりとぐ

三百八 法勝寺の住持。伝法灌頂ゆ長増古のゆまれゆりる。京府
の住僧義乃嘉ゆめられて七徳の義と二つとまりりまぐ入法冠
者と吳名紙付ふりるを。ひう紙ゆりて学問を抜く道世し

きりけるとぞ。慈法和尚一義を若てども。なおとも百をえて不授う
せさ勢あひろれば。伝法入乃とぞうちゝめひろうぼ。伝法入乃
相伝を授りて生れたりひろる。育月ふ数てうてせろう。梅之門のう仏
弟子ゆくしく。ろう九百判官の事。ふうゝく新く出のせうぼ。その冠
者のゆくゝ。たゝごろうるゆ。多れるの者をたるゝゝせろ。武士乃
ゆ弓るれうさいぼ生れ。ふるの者の者して。武士の道ていうせろうれ。
ぶ生れ。対の者と。今のびるかうゝゝ学ろうかり

(二百九十九) 六時礼懺い法然上人の事子。安楽といひる傍経をあつ
てはくろてつとあゝゝろう。其後を恭若親房といふ傍。ぼうたる
と宣て。夢的よみせろう。一念乃念仏の義初なり。浸脂家院の世代
ろう。法事懺もはゝく若親房始るうり

(二百九十八) 千年乃釈迦念仏。文和の比如海上人始らまろう

(二百九十七) ろ紀細工ふゆゝぶさかとつうふとゝゝ。妙親が力いてくたゞど

(二百九十六) 又条ごろうにいなどけ相ろろう。薩大納云度うこれ信ゝゝ。殺上人
は黒戸ゆく。墓を打ろに。ことをゝくけくうるあ。ぼそとうんゆ
ろれば。狐人のゆうについおてさゝ。のどをるとぼ。狐ととぞよまれ
て。神ごひ迎よろう。これんの狐をけそんゝろるにてそ

(二百九十五) 菌乃別歯入乃ぼさうなれ。庵丁者ゆろ人の作すぼうそ
経と出ゝろうまゝ。皆人ゆ者入乃庵丁とうんやとゆ人たぼうをと
く打出んもいうゝとだめゝひろるを。ゆ者入乃さる人すそひ猫百日ま
経と切ゆるとぼうろ紀ゆるゝ。さにゆゝどゆげてゆ待んとそこうれ
けゆゆぼうゝくつ紀くゝ。無ゆて人ともゆ入ろると或人ゆふ
大改入乃度よ。ゆろうゆ。されうゆ。おのまゝよゆろうさく
覚ゆ。なろ。切ゆゝ。ゝ人ゆゝて。ゝゝゝんと云ゝゝんゆ狐ようなん。
仏の条百日の経とゝゝんゝとの絵ろう。おうゝく覚ゝと人の猫
絵ひろるぼとおうゝぼ。ゝろうるまゝひゝく無ゆゝてゆと
ろも。無ゆてゆと

らうがはりうるかのようにぞ。それ人の容貌などもつねでおりゐた
ゆうにそなへうるも。海こにようけきたぞでくなくてそれぞれ方
いとよう。人はとそせうもついでなくて。色をきうんとうひさ
る。実の志なり。情しようてこそきんとうひ。物負けすけうざう
いひ付をどきうるしつう

三五五 とぐて人いと智恵紙がでさりの世おろ人のるれこざ海をどゆ
りぬが父のおうて人とれいてふとそ史書の文を引うりーさうく
いやこしうた。若のおみくいたこうとおぼしーあう

三五六 又ある人のりとみく。琵琶法師のれ倍をきうんとそ琵琶と
ゆうせうるにぢうのひとう蔵ようりーぶ。彫りて付をいふよおる
男れ中にあううどとうゆるがおれひさくの柄ゐやをどいふ紙
ゆんをづめとあうーう琵琶をどひくにてそめうう法師のびる。
をさうふも及ぬゆなうぞうあうようあやとがさうふさ

りうれひさうゐひりのれとうやいひてようーぬれよとぞおる人
倍うをしーゐ人いおろゆもようくぞんこうろくうんゆるあり

三五七 万れとがあうーどとうでゆるゆにも海てゐて人とうろどうやく
しーれをくみううんふいきうーど。男女老おうるみさる人そそうけきとも。
きこふうろくうちうれ人のうるうーれううをきどてくおりいうる
りのなり分のとがるれうるさ海よようめれぞおえうるけーれー
て人とないどーろふをかるゆ

三五八 人のれれとひうるふきうどーもあうーどゐのきくにいえんる
おこがゆーうふやんきどうとやうにうるうるようぬゆなう。
きうきるゆみうきうるゆも物さざうふとうひてやうるうんゐ
海てうきうぬ人もかどなうるうんうらくにいひ字せてうんいれと
うーくゐてみまう

三五九 人いきざ字及ぬゆを。我若うるきくに。扱も其人のゆれわさ

海へ出てどこうらしゆうらうんぱらぱらかるれみようとぞ一返一とひ
みるてそんつきるみけきせようぬるゆとも。ものづうつ空りうとわ
うもあきぞとばつうるうぬうにつぞやうさうんぱうるべき
ゆかいゆうのゆいわなきぬんのみうゆり

(三九) 立ある家にいそぐろなるんかのきに入るゆゆーわうど
なれ面ふんぷもんうぐうにうち入孤ゆうろゆれわもんぐふせ
うき孤ぐ面ふぐはよ入ちうそ海ゆどうんりーのうぬうちもわう
うゆわうんぷうぐんみい通形ゆれ沙よぷりうげまうてうつ鏡
にきううちわーまーうぐうつーぐーまーぐうつうさーわとうる我ホゲ心
ふ孤んーくのりれまーにまううふをんとうりのうれまわう
んんにわーあーう海ーうぐんひうまうぐれりうそうぐれゆうへ入まーうさ海ー

(三十) 丹波よ出雲とうーふ面ふ大社とうーてめぐうく他きうきぐ
のれのぐーとりやきうる面うれぐ秋の氏雪海ーー人其かもんわまうさそ

ひくいざ給へ出雲おぐにくのかみちかめさんとそぐーもそいきこる
にどのくおぐこてゆくしく伝おこてこうぢ蒔なる獅子ゑこあいね。
そむけてこうろさあよ立こうろれぢよ人いこくく感じそおるめで
こうひ獅子ゑの立ゆういとめづこふこれゆゑみこんと浜ぐこていふ
度ぐこ。ちゆせこれゆかごこんじどとがどや。ゑトおりこいへどのく
あゆこそ。獅よたふこあかこうぢ。ぢのつこに借こんゑどいこよ人れ
ゆこりりておとかくあちこうめぐこうほこる。祇園とこびてぢれ
社の獅子ゑれ立こまゆ。宮ておるゑこるゆふ行こんちこ承こうやや
いこまこれぢ。こゆゆふいさがるれこうべたの仕こるこふよひゆ
やこそ行こりて居立こていこれぢよ人こんこいこづこに浜こうろ
三章　やるい結よこゆるわい立さあこさゆわふよるべれこや。ゆゆ
どい立さあよ墨て。ゆのあこひこう紙ひるつ紙ゑこてゆひはく。
祝も立さあよ墨こる筆ころがどこうと。三条右大臣伝こまた。

動氣ゆふ源の家れ能ゆのこうちの人こうりみも立さあよおるこるゆな
しゆふこさあよこらゆ伝ゆれ
三章　清源寺近衛ちこそ。七年条出とでめこる事ゑ。皆こる芸
さこるゆるれ事たなり。其ゆ年ゆとゆこて。自慢のるゆこちゆう人
あゆこうゆこて。れこありここに家勝光院のゆこまて男れるとこ
らこゆるここて。今一度ゆ紙こゆる拾ゆこうぐるこうゆこて蒔ぐこ
ぢこれ絵ここて立こゆりこうにみるこここぢこでゆる所ゆこそこる
引こふここてのゆ人泥ゆの中にこゆにころび入こゆのゆやここざるゆ紙。
人皆感ぢ。當代ゆゆぢ場よおりこゆこ。ゆこ江戸里小路殿ゆ所ゆこ
堀川大納言殿狂作ゆ絵こ。ゆこ(用ゆこく系こ)こ。源治
のゆこ立ゆ巻ゆこ。こりひろげゆこて。ゆ今れ所にて紫の糸うぐゆ
ゆ恵こゆこ。文ゆこぢこんぜこゆここれるゆこて。ゆ年ゆこぢこんどれゆこも。
ぢこんぢ出されゆなり。ゆこくこ引こんゆこ伝ゆるゆこて求ゆるゆこと伝こう

ゐにたのきれそこくの狂ゐ伝とぷ〳〵うこびあゆこうれ〳〵とて
りて来ゐ世伝のさ〻ほどのゐ中四んたも考のゐゐきど言の人
いさてうのゐともぷうこく自慢〳〵ろかう後名服流のれ家ゐ。
袖と殺と一首の中にあ〳〵うゐんやと宮家ゐ〻ゐ伝〳〵きてろふ
秋の雪れ来乃きりてう花為乃ふ出くまゐく神こうゐ〳〵ん
と伝きび伝ゐ〻さ〻〳〵ゐてこてゆこれてろゐも附ゐあうこく。
年家とくこと乃の冥加ゐ〻ろうゐ雲かう。かどあ〳〵くしく考
しおうきと伝ゐゐ〻ろ九条相国伊通公の歌状ゐもてこゐゐゐ
き髭因とも出のせて自慢せてきこう　考生光院のつき猪
乃猪い在兼ゐの来なり。行房卿名信出していろにうこんと
せ〳〵ふ来ゐの人乃〻の来とれ出こうんを伝〳〵て花ゐかに夕を
おんきび考百里に実ゐとゐゐるゐ湯唐れ顔とうゐに百里
あやきうこと〻〳〵うこ〳〵とくぞうせなうゐゐのきこうゐる名ゐり

とて。筆者の作いひゆうこうゐ伝ろう。敷ゐとゐとさる
尾〳〵と西〳〵伝紀敷ゐもいうゐ。ゐ敷歩れむうおづつ色。
人ゐきこゐゐいて。三塔叡れのゐ伝〳〵に横川の常ゐ堂の内。
詩花院と出る古紀新西伝理ゐ成のろうこびあてゐゐ決
せどこと伝ゐうこと。雲伝てしくくゐ伝〳〵と伝ゐゐ〻ゐ
西べ〳〵伝理ゐ〻ろう出西べうこ〳〵ふうこいちろ伝
ろう。出の巣ゐくゐゐせげゐと能こ紀のごひて名こん伝〳〵ゐ。
行成伝異名字年号さ〻ろゐこん伝〳〵ゐ人皆異ゐ入
形葉沈ちゐて。道眼雪法義せ〳〵に八覚こうゐてここれて。雅ろ
花えゐ〻こいひ〳〵と形紀皆花えさろ〳〵に唐の中ろ長〳〵くゐと
いひ出〳〵これゐ〻〻くうんゐ伝ろ紀　賢明伝西こともゐひて。
加れ香ゐてこん伝〳〵にいきこさそぬ狂ゐ伝西ゐろて伝〳〵ゐ孫の
外こ伝西こうゐど法師花とこうゐ〳〵て求さをろにゐ〳〵さゐゐる大前。

おぼくてぞありとめあいどこいてぞ
そまりとめておせうといたれしふぐ
二月十又日。月わろ紀疫うちつてぞ
とろ新ろくして雖ゆしに僧なる女の姿みゆひ人ろ
てぬがうけ入てひざにわくれぐ匂ひみどもうるだろうれる後
わとめひてとろの紀ろにぞと居ろてはどさ法なれぐ立ぬ。
其後わるれ形さ四の古紀女房のぞろるゆいれしつぐでぞ下に
ろさな紀人よおつろろとんとしまるゆんみしぐ情みしと
招まろ人るんみとの給ひ出しろにさふてそんわゆ孫と
ドてゆこぬぐるなよ少行しぐの雖実れ疫古房の四ろ人乃
ころんぐ去ろてさろ四女房と仰ろそて出しぐ給を後ろて羽
かどうをんわぐそ立れ系てドせ異わろんとそたろ給ろとそ
(三四三) 八月十又日九月十三日い妻宿なりぐ宿法四るゆ人に月をりて

わそぐふ良疫ことを
(三四四) 去のぐ乃浦れわまのこるめそ立ぬせてぐろふれひもりる人吉げ
のろんふろろのようん仏の色てそ法ろぐ義とろ海しろの。
宗ぐろれゆもおかろめ親兄弟ゆるしてひこるふむろをころ
んひこまだ四ろうめぐしぜふわろそぐる女のふげゆ紀老法師わや
しのあづまん仏たゆだろしれよ付てさそろわろんゆどろふ
と仲人行ろもんみくれさ歯ふひるしてぞろきぐ去ろぬ人
をひろんりて来ろんわひゆさよ行ゆろてのそふせんゆ
月の法ろさともゆけそたんのゆゆゆるわひろらろんそつれせ
ぬとのたみくもわろめをぐてようそれ人乃れまろなひそろんろて。
んつきゆれゆおかろぐしよれ女ゆろんよ付てもふぐろうんよ
ろ。羊もろけゆん男ゆくわやしれ母のろあにわてろ乃とて
ぐふゆさんやと人もんおとろせられ。乃ひむろひねろろんも。

新たづうしく覚えんぴとてあひおううめ拾乃死ううたづ記
夜の勝月よきゝどこみうれう系れ家分出んあこ明のそも我こ
さうあよきのだるべくもううこんぴ人いきぐ交ぬざこんよいたうど

(三五) 屋月のきとうあるうぬいたづくも住せどゆどてうけぬんそで
めめ人ぴ一夜の中にうあでうるこあもうんくぬるやあうん病のおうる
も住をる陸うくしてが死をねとでみちうしされたいきぐ病ぬうう
どが死よおりむうぐる狂い常住平生の念よううびてぴの中にあ
くのうれうてはぬうづうふ乃と波せんとうふ狂ふ病と信てが
門ふのどむ附而死一うもあせどぴふうひうくて年月のけどい
と悔てぴなりくこうとうて命をきくこせぶ夜と日ふついでぴ
るうの事おこてうどうくてんそ孫ぐひとおことうめとゆどく
おりうめきぶ我うもあくどぞれ孔くて果ぬぴきどひのくこと
めくめぴはうぬ先人くいそだ仏よとくべぴ而死と波どそのちぴと

波ふてぴうよむうんんとせぶ而死つくべうくどぬ幻乃生の中にのう
とうあうんどべて而死こうあ而死ふ来くぶ而人迷孔
ことたうてぴうあうとべうび迷に乃うれ波下くて乃よむふ
附こうあうく而作うくてんこ分ふどくたづうあり

(三六) とこくうあ人ふ遠叩よ作ぬうるくうゆひとふ若楽のうあうう。
楽とうのいこのこ巻をるうゆむ附かくぬ楽
歌をる而ぴふい名なうぴ名ふ二種五ぴ仏と芸とのうまれ也。
二ふいる名歌三ふいあどうひあり乃の死ひこうふたうど色顔仏
の相こうおこうてそこどくのうどひありあざうんよたうど

(三七) 八よ波くく年文よ向ていそく佛いう波ねふらひくんとうて文
どいきく仏ふい人の波こるあうとうぴそ人いのとうて仏ふ波作
ゆくんとい文仏のそくくにうてなるうりと音文四をくくひうあ
かうけとどのどそくいるとうこてうぴそきもさ仏のかとけ乃

そ〻ふるくぬかふかうと。ぞ〻ぬいるる者
一のかとけいうるる仏ふうひるおとつの時又そ〻ろうつ〻ろ
りんきようやうにりんといひてうらふぞいつめうきうえうこと
へどぬかうと。法人ようろうてねんじ奥じた

書畫一筆

洛西住
下河邊拾水

板木師
二世
丹波屋喜右衛門

安永七年戊戌春

三條通烏丸西江入町
谷口勘三郎 合

新町通三條上ル町
吉田善五郎 版

京都書林

早稲田大学図書館
011788022524